

〈翻訳〉

アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈M. F. デントン書簡一訳および註一〉 (12)

阪 上 敦 子 監訳
秋 山 恭 子
吉 岡 弘 子
小 林 弘 美
小 島 紀 子
柿 本 真 代
矢 吹 世 紀 代

書簡翻訳：前号からの続き

〈バル書簡 BE-6〉【秋山恭子 訳】

1910年1月6日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

ずっと遡ること、昨年の夏に同志社の年次報告書とラーネッド博士¹への心からの感謝の気持ちを示したあなたの手紙²を受け取りました。ですが、それ以後はそちらからの手紙は頂いておりません。当方からは単にお手紙拝受のお知らせをしましたが、デントンさんの手紙の内容はとても有難かった

ですし、報告書も受け取り嬉しく存じました。ラーネッド博士にはいつも深い尊敬の念を抱いており、敬服さえしております。それに私もパートン博士³が彼を頼りにされていることを知っています。財務担当のウィギン氏⁴はラーネッド博士のことを、経理係としては世界の伝道の現場で三本の指に入るほどの人物だと断言しておられます。まさに誰の目から見てもすばらしい人物だということでしょう。

ラーネッド博士はデントンさんのお仕事についても当方に報告していただきます。新しい建物建設の進捗状況⁵を教えてくださいますし、当方でも女学校の構内が最近どうなっているのか、結構よく把握しています。デントンさんご自身は、今はもう適切な住まいに落ち着かれていますことと思います。それについては情報があればいいのですが、残念ながら当方にはそれほど入っていません。お互いに出来るだけ連絡を密に取るようにいたしましょう。

オールストン⁶からネリー N. カウルズ⁷という名前のご婦人がたった今来られました。ハートフォード⁸の牧師、ジョーゼフ・ツイッチェル⁹さんのご親戚で、高い教養をお持ちのようで魅力的な女性です。旅行をととても多くされていて、ヨーロッパやアラスカなどの未開の地へも行っておられます。1911年3月から、日本を経由して中国へ旅する計画を現在立てています。始めるのに早すぎることはありません。日本について有益な情報を得ようと真っ先に訪れた先の一つが、彼女には当然ながら、アメリカン・ボード本部事務局です。ご自分と母上（61歳）のための生活費として、1日4ドル以上は使えないご様子です。「生活費」の中には旅費、珍しい物の購入費用、手数料などは含まれていません。しかし日本滞在中、母上は当然ながらホテルや民家への宿泊には気後れされているようです。お二人の面倒をしばらく見て報酬も得たいと思う善良な宣教師が京都におられたら、とカウルズさんは考えておられます。その件についてどう思われますか。デントンさんがだめでもケーリー一家¹⁰ならできるかもしれませんね。時間があるときにお考えをお知らせください。

カウルズさんは聖公会¹¹の会員なので、私たち会衆派¹²の伝道について少し学んでもらいたいのです。ご自身も京都にある聖公会のステーションの方々ともお知り合いになりたいでしょう。先に述べましたように、カウルズさんとは一度お会いしただけでよく存じません。ですが、京都での伝道の現場を積極的に見たいというお気持ちがおありのようですし、帰国後、当地での話をきっとしていただけるものと思います。

ご面倒をおかけしますが、お二人をしばらく学校に滞在させてあげるのは、カウルズさんと母上だけでなく、あなたや女学校にとっても「神の恵み」になるだろうという期待を抱いて泊めてあげてください。お二人は丸1か月間、あなた方とご一緒したいと思っておられるのかもしれませんが。あるいはただ単に少し立ち寄られるだけなのかもしれません。

敬具

イノック F. ベル¹³

1. Learned, Dwight Whitney (1848-1943) 1873年イエール大学大学院卒業。1875年来日し京都ステーションに所属。52年余りに渡り同志社の教育に尽力。同志社大学初代学長。
2. 1909年6月8日付のデントン書簡 [292] 【*Asphodel* 55, pp.225-226】のことか。
3. Barton, James Levi (1855-1936) 米国バーモント州シャーロットでクエーカー教徒の家に生まれる。1881年ミドルバリーカレッジ卒業後、ハートフォード神学校へ進学。1885年、海外伝道に関心を持ち宣教師として妻とトルコへ向かうが、7年後、妻の病のため帰国。1892年 N. G. Clark の引退を受けてアメリカン・ボード本部事務局の海外担当幹事に就任。
4. Wiggin, Frank H. (? -1920) アメリカン・ボード本部事務局の財務担当役員。1886年に財務局で働き始め、1896年に財務担当に就任、1920年に亡くなるまで24年間その職にあった。
5. この書簡(1910年1月6日付)が書かれた頃、建設中の建物は雨天体操場で1910年3月竣工である。またその前年の1909年夏には旧校堂を廃して新寄宿舍及び教師館の新築工事を起こし、12月に工事を終わるとの記事が報載にある。原文では“the growth of the new buildings”とあるので、当時構内ではいくつかの建物の建築計画や工事が絶えず続いていたと考えられる。(『同志社女学校期報第29号』p.21)

6. Allston マサチューセッツ州ボストン近郊の地区
7. Nellie N. Cowles 詳細不明
8. Hartford コネチカット州中央部の都市で州都。
9. Rev. Joseph Twitchell 詳細不明
10. オーティス・ケリーの一家のこと。Otis Cary (1851-1932) は1878年アメリカン・ボードの宣教師として妻と来日。アマースト大学在学中に新島襄と知り合う。神戸・岡山・大阪ステーションを経て、1892年より同志社神学校教授。妻の Ellen Maria Cary (1856-1946) も同志社女学校専門学部教授として英語と英文学を教える。長男 George と三男 Frank については後出 (BE-8) 註11参照のこと。戦後、学生寮アーモスト館に住んで同志社大学で教えた同名の Otis Cary の祖父である (父は三男 Frank)。
11. 聖公会はカンタベリー大主教を中心とするイングランド国教会から生まれたキリスト教会で、ローマ・カトリックとプロテスタントの中間に位置する教派である。18-19世紀に英国と米国の両聖公会から東アジアへ伝わり、日本には1859年に米国聖公会から宣教師が来日して、1887年「日本聖公会」が創設された。
12. 会衆派は1620年迫害を逃れてニューイングランドに移住したプロテスタントの一派で、ピルグリム・ファーザーズは有名。新大陸に根を下ろし、ニューイングランドを中心に有力な教派に発展、ハーバード大学やイエール大学などを設立。1810年に会衆派により結成された「アメリカン・ボード」は海外伝道を開始し、日本では「日本組合基督教会」を設立。
13. Bell, Enoch Frye (1874-1945) アメリカン・ボード宣教師。1902年11月来日。札幌、神戸を経て1904-1905年、京都に在籍するが夫人の体調不良により1905年帰国。1906年、ボストン本部の海外部門副幹事に就任。

〈デントン書簡 D51〉【吉岡弘子 訳】

1910年4月28日受領

日本 相模 宮ノ下
天然温泉 富士屋ホテル
京都 (同志社女学校)

この手紙はどうか事務室に持参しないでください。これは「公式の書簡」ではありませんので規定の便箋に書いておりません¹。日本ミッションのメ

ンバーから同じミッションのメンバーと [元] トルコ・ミッションの同僚宣教師の方への単なる私的な手紙ですので²。

拝啓 友人であり兄弟宣教師の方々³

まず、ネリー・カウルズ⁴さんについてのご依頼にお答えいたします。彼女が京都に来られるときに、もし私の家が建っていれば、そこへお招きしますが、まだなら、どこか他の場所を探すようにいたします。私は1日5円を払って [下宿して] いますが、これはこちら京都では、「非常に特別」です。しかし一部屋に二人となると、「もっと特別」になるでしょう。日本では二人が1日4ドルで暮らすことは無理だと思います。どうか彼女にそのような期待を持たせないでください。こちらには個人の賄い付き下宿屋というものは一つもありません。京都ではミッションズ・ソウター⁵が時々親切にも、1日3円50銭で二人一部屋で受け入れています。もちろん、ケリー夫人⁶や私は滞在者には実費以上のもの、例えば1日約2円50銭以上は請求いたしません。これで1月5日付のそちらからの手紙⁷にある問い合わせの件は終わりにいたします。

1月14日付の「社交的な」お便り⁸を有難うございます。そしてベルさんに、ご丁寧にも独身女性宣教師全員に手紙を書いたら、とお勧めになったバートン博士にもお礼申し上げます。それは大変すばらしい手紙で、宣教師ならずとも、独身女性ならどなたでもあのような「打ち解けた」手紙を受け取られたら嬉しく思うことでしょう。

ついでに申しますが、あるとき大阪ミッションの一家族が、大阪、神戸、京都の独身女性宣教師全員を感謝祭の祝宴に招いたことがありました。何人かは気が進まなかったのですが、「子供たちと家で寂しく暮らしてるにちがいないから、愉快に過ごせるように皆で盛り上げてあげましょう」と話し合い、全員で参加しました。そして楽しい時を過ごし、「どうも有難うございます」と別れの挨拶をしているとき、招待した夫人が、とても大きな甲高い

アメリカ人特有の声でこう言いました。「一人ぼっちの寂しく哀れな人たちを皆招待し、気分転換に楽しいときを過ごせるようにしてあげたいと言ったでしょ」と。とてもお忙しいなら読まないでください。でもこれは本当にあった話です。

レクター牧師⁹についておっしゃっていることに、非常に興味があります。宣教師候補を審査するとき、彼のやり方に沿ってもう少し念入りに行えば役に立つかもしれないと思います。京都へ来た旅行者の一行が私に、「京都の大きなユニテリアン派¹⁰のミッションを訪問した」と言っていました。「ユニテリアンですか?」と聞き直しましたが、この人たちを説得することはできませんでした。というのは、この人たちは英語礼拝に参加して説教を聞いていたからです! そちら [ベルさん] のおっしゃっている「不健全」という意味が私にはあまりよく分かりませんが、親愛なる宣教師同胞のベルさん、そしてバートン博士、私たち宣教師の仲間が同志社で行った英語礼拝の中には、自由な考え方をはるかに行き過ぎた内容のものもいくつか見られ、礼拝に参加した旅行者や、共に礼拝を守っている他のミッションのメンバーに、非常に大きな失望と悲しみをもたらしているのです。ですからユニテリアンでなく、聖書は神のみ言葉である、と信じる私たちにとって正しいと思えるのは、これら極端な考えを持つ人たちは [私たちの教会でなく] どこか他の場所で、そのような考えを吹聴すべきだと私は思います。もし日本の教会は「健全」ですか、と尋ねられたら、日本の教会は日本ミッションの一部の宣教師よりはるかに「健全」だとその人たちを納得させてください。デイヴィス博士¹¹やケリー博士¹²にも、どうかお尋ねください。私たちのミッションに属する宣教師たちが、前夜どこかの雑誌で読んだ的外れの暴言を口にすれば、それは控えめに言っても悲しく辛いことです。そうであっても、自由は大変貴重です。どこで線を引いたらいいものか分かりませんが、軽率な人々が軽率な発言により、過激論者とは同調していない教会全体に批判が及ばないようにするしかありません。どうか主が福音を伝えるためにお選びになった人々

の言葉と心をお導き下さるようにお祈りいたします。

原田校長¹³の米国訪問を成功させるため、全力を尽くして下さるようお願いいたします。原田先生は素晴らしい方です。「新校舎」建設¹⁴のため広い空間が前面に広がり、同志社の女子部は今はとて素晴らしい景観です。

政府の規制¹⁵が我が校にどれほど不都合を及ぼすかなど、全く予想もしませんでした。そのため、再建された「ミッション・ホーム」¹⁶を教室として使用することで、直ちに「承認」を得ようと最大限の努力をしています。

昨年我が校を卒業した生徒の一人が公立女学校¹⁷で1年間教えて、多大の貢献をしました。また、地元の教会でも大きな助けとなって、日曜学校の出席者数を30人から150人に増やしました。政府は今、彼女のような地位の教師に教員免許の取得を必須としたため、この卒業生は職を失わざるをえません。彼女が教員免許を取得できないので、学校からは望まれ評価されていた勤務も、学校は諦めざるをえません。「認可」された学校を卒業していないため、試験さえ受けることが出来ないので。

我が校の生徒二人がつい最近、女子英学塾¹⁸を卒業しました。他の生徒たちは教員免許が認可された高等女学校から来ていましたので、免許が授与されました。しかし、我が校の一人は級長もしたり、もう一人は津田先生の個人秘書であったにもかかわらず、この二人だけが教員免許を取得できません。

学校は授業料が入らないと、経常費が得られないのです。我が校では常に女学生が退学しています。教員免許取得可能な学校を選択せざるをえないからです。昨年は1200円の負債が出ました！

ベル夫人がお元気でいらっしゃることを願っております。どうかよろしくお伝えください。お二人のご親切に心から感謝いたします。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. この書簡はデントンが箱根の宮ノ下にある富士屋ホテルに滞在中、ホテルの便箋

で出している。宛先は文面からベルだと判る。

2. 「日本ミッションのメンバー」はデントン自身のこと、「同じミッションのメンバー」はベルのこと、そして「[元] トルコミッションにいた同僚宣教師」とはパートンのことと思われる。ベルについては前出 (BE-6) 註13参照。パートンについては前出 (BE-6) 註3 参照のこと。
3. 「友人、宣教師兄弟の方々」とは、ベルとパートンを指すと思われる。
4. カウルズ 前出 (BE-6) 註7 不詳
5. 手書き原文では“Missions Sowter”とあるが、詳細不明。
6. ケーリ夫人 前出 (BE-6) 註10を参照のこと。
7. 1月5日付の手紙とは前出の [BE-6] で、1月6日付の間違いである。
8. 1月14日付の手紙は見つかっていない。
9. Pastor Rechter 詳細不明
10. ユニテリアン派 (Unitarians) 神ひとりだけの神性を信じ、イエスは神ではないとする一派で、キリスト教の正統信仰である三位一体を否定し、神の単一性 (unity) を主張した。特にアメリカでは会衆派教会のなかでハーバード大学神学部を中心に一教派になるまでに発展した。
11. Davis, Jerome Dean (1838-1910) ニューヨーク州 Groton 生まれ。ペロイト大学及びシカゴ神学校を卒業。アメリカン・ボードの宣教師として1871年来日。神戸での伝道活動の後、京都に移り新島襄の同志社英学校設立に協力して、終生、神学教育と学校の維持発展に尽力した。
12. ケーリ博士 前出 (BE-6) 註10参照。
13. 原田助 (1863-1940) 熊本藩士、鎌田収の次男。1880年、同志社英学校に入学後、神学科に転じる。卒業の翌年、1885年に按手札を受けて神戸教会牧師に就任。1888年渡米、シカゴ神学校、イエール大学に留学。帰国後、番町、平安、神戸の各教会の牧師を歴任。1907年1月から19年1月まで同志社第7代社長に就く (1918年9月以降は総長と改称)。同志社の大学昇格と発展に寄与した。1919年、総長を辞職。1920-32年、ハワイ大学東洋学部の教授に就任。
14. 「新校舎」は旧静和館 (Pacific Hall) のこと。1911年11月19日定礎式、そして1912年8月竣工。
15. 政府の規制とは「中等教員無試験検定校」に指定されるためのことであろう。当時、多くの女子専門学校がその資格を求めたが、政府からは、教員スタッフの履歴・業績、教職教育の内容など、そしてその他に教員養成上必要となる施設が求められ、この時点で同志社女学校はまだキャンパスが整備中だったので、デントンは慌てたのであろう。職業資格の得られる各種専門学校卒業生にはそれぞれの資格が与えられたが、英語教育に関しては、「英語教員志望者に対して必要な学科を教授するこ

- とを目的」に設立された津田塾のみが、1905年から「中等教員無試験検定校」に指定されていた。ちなみに同志社女子専門学校が英語・家政共に無試験検定校になるのは、1924年であり、両科目とも全国で4番目であった。
16. 再建された「ミッション・ホーム」とは、最初に建てられた校舎の右翼部分を再建した建物で、デントンなど宣教師の宿舎になる予定だったが、この時点では全館教室として使用されていてデントンはまだ住んでいない。
17. デントンは生徒が“Gov. High School”で教えたと書くが、ここでは公立の高等女学校のことであろう。この書簡の1910年当時、1899年に公布された「高等女学校令」により、北海道とほぼ全ての府県に公立の高等女学校が設置されていた。
18. 津田梅子創設の女子英学塾（のちの津田英学塾）は初めから高等教育機関として1900年に設立され、1903年に第一回卒業生を出した。その翌年1904年には専門学校の認可を受けて英語科教員無試験検定の許可を出願、1905年には無試験検定取り扱い許可を女子の学校として初めて受けた。

〈バートン書簡 B-21〉【小林弘美 訳】

1910年5月17日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

ベルさん¹宛のあなたの個人的なお手紙²に私も入れていただき、ご親切とても嬉しかったです。ベルさんをつい先日、数週間の休暇に送り出したところで、彼はいまだにその手紙を見ていません。それでベルさんが手紙を見る前に、これ幸いとばかりにお手紙拝受のお知らせを私からさせていただきます。

ベルさんは病気ではありませんが、去年の秋からここ事務局は特別な状況になり負担をかかえています。というのは、私がエジンバラ宣教会議³関連の仕事に非常に多くの時間を割かねばならず、不在の間は全てがベルさんの肩にかかります。2、3週間したらまた出かけますので、6月、7月はベルさんが〔海外〕部門の責任者となります。それで私が発つ前に、彼には少

し休みと気分転換が要るのです。

同志社の建物⁴の建築費として特別寄付金がデントンさん〔女子部〕に渡るのを知って、当局は非常に満足しています。その建物が完成に近づきつつあることを願っています。そのために今日1000ドルが太平洋ウーマンズ・ボード⁵から当局に届いたばかりです。これは近いうちにしかるべき手順を踏んで〔そちらに〕届けられるでしょう。その事業は当初はかなり困難に見えたものの、非常に満足がいくように完成に向かっていようですね。

ラーネッド博士⁶はここ〔アメリカ〕に居られますが、まだお目にかかっていません。今週、ニューヘイブン⁷から手紙をいただきました。博士は来週ボストンへ来られる予定です。これからの数か月間に、これまでは中止せざるを得なかった各ミッションとの手紙のやり取りをもっと念入りにするつもりです。このように書いていますが、この間も全宣教師の方々からの手紙にはすべて目を通しました。ミッションの一般的な仕事は言うに及ばず、個人の仕事に対しても私は一瞬たりとも興味を失ったことはありません。

ダニエルズ博士⁸を個人的にご存知だったかどうか存じませんが、長年にわたり、ボードの国内担当幹事をしておられました。お聞きになって残念に思われるでしょうが、今はサウス・フラミンガム⁹の家で重病になっておられます。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. ベル 前出 (BE-6) 註13参照のこと。
2. 4月28日付のデントン書簡 (D51) のことか。
3. 1910年6月14日-23日にかけて開催されたキリスト教の宣教会議 (Edinburgh Missionary Conference)。アメリカ、イギリスを中心に1300人以上の代表がスコットランドのエディンバラに集まり、今後の世界宣教について協議した世界初の会議。同志社の原田助社長も出席した。
4. 原文では“the Doshisha building”としか書かれてないので詳細は不明だが、

この書簡の1910年5月の時点での新築校舎は、女学校雨天体操場である。前出〈BE-6〉註5も参照のこと。

5. ウーマンズ・ボード (Woman's Board of Missions) はアメリカン・ボードと協力して活動する女性伝道団体で、東部(WBM)、中部(WBMI)、太平洋(WBMP)に分かれている。太平洋ウーマンズ・ボード (Woman's Board of Missions of/for the Pacific) は西海岸の州を中心に活動し、同志社女学校の女性宣教師(スタークウェザー、デントン、クラブなど)を支援した。
6. ラーネッド博士 前出〈BE-6〉註1参照。
7. New Haven コネティカット州南部の都市、イエール大学の所在地。
8. Daniels, Charles H. (1847-1914) アメリカン・ボード本部事務局の国内担当幹事を1893年以来15年間担当。1914年8月3日没。ニューハンプシャー州ライム(Lym)生まれ。アーモスト大学とユニオン神学校を卒業。アメリカン・ボードで働く前はいくつかの州の会衆派教会で牧師をした。
9. South Framingham マサチューセッツ州中央部の町、ボストンの西32キロ。

〈バートン書簡 B-22〉【阪上敦子 訳】

1911年4月13日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

長らくあなたには手紙を書いていませんが、私が書かないからと言って、デントンさんと続けてきた繋がりが疎遠になっている、というわけではありません。なぜならそちらからお手紙をいただいたり、ご自身について、そしてお仕事についてはこちらでたびたび聞いておりますので。太平洋ウーマンズ・ボード¹との密接な関わりで、デントンさんとあなたのお仕事に関連して、どうしても手紙のやりとりをする必要が生じるからです。

女子部の新しい建物の完成²ではきっと大きな達成感を感じておられるはずです。この建物があなたの期待にすべて答えられ、予想したように〔今現在〕女学校のためになっていることを願っています。原田社長³の下、同志

社が大きな発展を遂げていることに当局は大変喜んでます。社長のアメリカ訪問はとても価値があるものでした。どこに行っても非常に尊敬されて、ご自分や同志社にも多くの新しい支援者を得ることができました。彼の訪問で、学校〔同志社全体〕には何らかの実質的な寄付が来ると信じています。それがいつになるか、今は判りませんが。しかしその寄付を考えている富裕層を一人か二人知っていますし、そうなるように出来る限りのお手伝いをしています。

ここポストンで間もなく開催の宣教博覧会⁴を期待して楽しみにしています。これは大きな実験ですが、それでいて十分にやる価値はあるとわかるでしょう。最大のメリットは表には現れません。8千から1万人の若者たちが5週間の博覧会開催期間の間、ガイドや給仕役にふさわしいように、冬のほとんどの間、熱心にミッションについて勉強していましたし、まだ勉強しているのも事実です。これら同じ若者たちは、博覧会終了後は各々の教会で伝道について学ぶ指導者となり、決して関心をなくすことはありません。なぜなら期間中は宣教師たちとそこで緊密な関係になっていくことでしょうから。そしてその関心を期間中にさらに深めることでしょう。ベルさんは博覧会の仕事で手一杯の状態です。彼は並外れた仕事をしましたし、終了まで博覧会にかかわることでしょう。

敬具

ジェームズ L. パートン

1. 太平洋ウーマンズ・ボード 前出〈B-21〉註5参照。
2. この書簡が書かれた1911年4月までに完成しているのは1910年3月に新築落成した雨天体操場であるが、詳細は不明。
3. 原田助 前出〈D51〉註13を参照のこと。
4. the Missionary Exposition アメリカで初め開催の宣教博覧会。1911年4月24日－5月20日、ポストンの Mechanics Building にて開催された。

〈バル書簡 BE-7〉【秋山恭子 訳】

1911年7月31日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

あなたが Deng 熱にかかっておられるということ、日本の「家族」¹の誰彼から知りました。便りのないのは良い知らせですので、長患いにはちがいがなかったでしょうが、無事に乗り越えられただろうという結論に至りました。この手紙が着くころには全快しておられることを強く願っています。

共に働く終身宣教師を、デントンさんのために当局が任命できると私もご報告できればよかったです。ボードはヒルさん²の歳を考えると、[終身宣教師としては] 任命しない方がよいと考えています。しかし、あなたの不在中、何とかヒルさんが採用されて教壇に立てるような方法が見つければ、と願っています。彼女の教師としての力量は高く評価されています。

いつ帰国される予定ですか。そろそろ大いに必要な賜暇³の時期ではないでしょうか。当局の記録が正しければ、もう10年以上も環境を変えておられないし、デントンさんには変化は必要でないにしても、西海岸の支援者の方々には、あなたに会って、お互いの個人的な交わりを通してだけ得られる刺激が確かに必要なのです。運営委員会は、日本ミッションからの要請通りにデントンさんへの賜暇を認可いたしました。

時折、京都の校舎整備状況⁴について耳にしますので、何らかの具体的な進展があるということは当方でも把握しています。デントンさんがアメリカに帰られたら、ご自分の仕事について、もっとたびたび直接お話しを伺う機会があるかもしれない、と期待しています。デントンさんには日本のためにアメリカでお話になるよい機会がきっとあるでしょうが、例えば中国に比べると、日本には宣教師が必要だということがなかなか信じてもらえないので

すよ。

妻⁵と私はしばしば京都で過ごした日々や、あなたのお心のこもった友情の言葉を懐かしく思い出しています。何と言っても、続くのはそのような友情であり、あなたが育んでおられるような方向で友情を作り上げていく人は誰でも永遠に友情を築けるのです。

敬具

イーノック F. ベル

1. 「家族」“family”とはJapan Missionの宣教師仲間のことか。“We have often spoken of the ‘family spirit’ in the Japan mission, and have often longed to return to ‘the family’.”と、家族のように他の宣教師たちと過ごした頃を懐かしむ記述がベル書簡〈BE-1〉【*Asphodel* 54, p.201】に見られる。
2. Hill, Anna Lairmia (1860- ?) Chicago Normal School 卒業。1910年9月1日來日して大阪に滞在。翌年1911年一旦帰国するが同年10月13日に再来日して1914年11月12日まで京都でデントンと共に同志社女学校で教えていた。Hillはこの書簡のときにはすでに51歳で、再来日の折も終身宣教師としてではなかった。尚、デントンが休暇を取ったのは1917年1月からであった。
3. 賜暇 (furlough) は終身宣教師に与えられる原則1年の母国での有給休暇で、男性宣教師とその家族には7年ごと、独身女性宣教師には最初の任期の5年目の後で与えられた。(*Handbook for Missions and Missionaries of the American Board of Commissioners for Foreign Missions* [1920年版]、p.55)
4. この書簡の1911年7月頃、どの校舎の建設途中か詳細は不明だが、静和館の定礎式が同年11月19日、竣工は1912年8月であるので、原文の“the building operations”は工事開始までの校舎整備工程かと思われる。
5. ベルについては前出〈BE-6〉註13参照のこと。ベルの妻は Anna Elizabeth Bell (1873-1955)。コネチカット州ニューヘイブン生まれ。夫と共に1902年11月來日。

〈バートン書簡 B-23〉【小島紀子 訳】

1912年1月4日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

少なくとも同志社女子部への10万ドルの贈与に関する件では、私の方で確かに明らかな誤解がありました。カルマン氏¹がその件で私と話したとき、氏はジェームズ氏²と彼の母上³からデントンさんに宛てた書簡については知らなかったのだと思います。なぜなら、10万ドルは同志社全体にとって理事会が最善だと考えた通りに使うように送ったのであって、女子部へという限定はなかった、というはっきりとした印象を私は持ちましたので。[その後]、カルマン氏は速記者に、何ら誤解が起こらないように、対象となる箇所⁴は削って私に手渡すよう頼んだのです。実は、私は書簡全文の写しは持っていませんでした。[一旦は]手元にあったのですが、最後まできちんと目を通していなかったのです。

何卒、一瞬たりともここにいる人の中に疑念を抱く人がいる、とは思わないでください。当局はあの素晴らしい贈り物に心からのお祝いを申し上げますし、その贈り物が成し遂げるであろうことを思うと嬉しく思います。すでにご存じのように、[アメリカン・ボードの]運営委員会は、[同志社の]理事会が今その土地を全面的に活用して女学校を拡張できるように、そこのゲインズの所有地⁵のすべての権利を譲渡しました。

1年以上前に、私はカルマン氏と同志社について、そして同志社には資金が必要だということを長時間話しました。まず強調すべきは寄付金だと私には思いましたので、もちろん寄付金については詳しく述べました。建物を建てて欲しいと依頼するよりも、大学に寄付金を、とお願いする方が難しいのです。私は女子部男子部を問わず全体として、「同志社」は寄付を必要としており、支援する価値があり、私たちが信頼している学校であると彼に伝えました。カルマン氏はのちにその贈与について語ったときに、その時の会話に触れました。

もうこの問題では、なにも悩まないでください。デントンさんのご努力が立派に実って、すばらしい贈り物をいただけたことを当局も喜んでいます。

返却をご希望でしたジェームズ夫人宛のデントンさんの手紙の写しをここに同封してお返しいたします。その手紙はあらゆる点で非常にすばらしいものです。また、その贈り物についてのジェームズ夫人と〔息子の〕ジェームズ氏の手紙の写しもお返しします。

お迎えになったばかりの新年が、日本でのご自身のご経験と同志社の歴史の中で最高の年になると信じております。

敬具

ジェームズ L. パートン

JLB/E

同封物あり

1. William W. Carman はジェームズ夫妻に長年仕えた秘書で、1917年、ジェームズ夫人の没後1年、ウェルズリー大学の卒業式でジェームズ夫人の人柄について述べ、更にそれまで大学への「匿名」での多額の寄付がジェームズ夫人によるものであったと公表した（坂本清音「ジェームズ館の寄贈者、ジェームズ夫人」『同志社談叢』30号、2010、p.118）。
2. James, Arthur C. (1867-1941) ジェームズ夫妻の次男。アマースト大学卒業。個人としては中瀬古六郎を援助。同志社のアーモスト館始め、男子校のために巨額の寄付をした。
3. James, Ellen Stebbins Curtiss (1833-1916) 1911年、息子 Arthur C. James と連名で10万ドル（当時の日本円で約20万円）を女子部指定で寄付。1909年には平安寮新築のため、最初に女学校に1万円弱の寄付も行っている。1907年に亡くなった夫 Daniel Willis James (1832-1907) から莫大な遺産（4000万ドル）を相続したが、夫の慈善事業に対する精神をしっかりと受け継ぎ、各方面に寄付を行った。
4. 書簡のこの箇所には「同志社全体に送る」、又は「女学校に送る」というような記載があったのではと考えられる。
5. “the Gaines property” については詳細不明。

〈デントン書簡 D52〉【柿本真代 訳】

京都 同志社女学校

1913年 8月12日

拝啓 友人ご夫妻¹

例年のように京都の夏は1年のうちで最もおもしろい季節です。日本最大の祭り〔祇園祭〕が行われ、女学校の庭はいつも増して花開いています。230名もの女生徒が花開くのを今か今かで見守っているときには、ほとんどの蕾はまだ開いていないのですが。夏の間には日本各地に住む多くの学生〔卒業生〕がこちらへ訪ねてきてくれたり立ち寄ってくれて、日々友情を新たにしています。

7月の中旬には、ブライス夫妻²が私の家へ昼食に来てくださいました。原田校長³に頼まれましたので、本学のすばらしい静和館を北東角から撮った写真⁴をそちらにお送ります。写っている我が校の名物の藤棚は大きさ、樹齡、そして趣きでは京都の藤には負けますが、ここよりすばらしい藤棚は京都にはありません！ブライス氏は京都では原田校長の招きに応じただけで、東京でもほとんど招きに応じられませんでした。氏は同志社とその事業に大変関心を示してくださり、ご夫妻と私たちの間には固い友情が結ばれたと感じています。

原田校長は、この写真を雑誌『コングリゲーションナリスト』⁵に載せるように、ブリッジマン氏⁶へ依頼してくれないかとおっしゃっていましたが、私はむしろ『ライフ&ライト』⁷の太平洋〔ウーマンズ〕ボードのコラムに投稿したいと思っています。写真のオルヴィス夫人はウェルズリー大学のオルヴィス教授の母上です⁸。他にあなたがご存知と思われるのは、私たちの宝のような教師のひとり、プリンモア大学、そして現在はコロンビア大学へ留学中の松田道⁹です。同志社大学の学部長、水崎教授¹⁰（彼の素晴らしい経歴をお聞きになったことはあるでしょうか）、グリフィス博士の姉上¹¹は富森夫人¹²の先生でいらっしゃいました。上田教授の叔母にあたる方¹³は、1872年に皇后により¹⁴アメリカに派遣された少女のうちのひとりです。

今日はシドニー・ストロング博士¹⁵がお嬢さんと来てくださり、大変刺激を受けました。このお嬢さんが宣教師として日本へ来てくださればいいのに

と思っています。彼女のような若い女性こそ私たちが求めている人材です。ストロング博士はシアトル在住の日本人に大変よくしてくださるので、こちらの日本人も彼を大変温かく敬意をもってお迎えしました。

デフォレストさん¹⁶の婚約以来、そちらに手紙を書きましたでしょうか。彼女がどんなに立派に働いてくださったか、お伝えしたいです。私には彼女のことを諦めきれません。デフォレストさんはすぐれた教師で、万が一この厄介な結婚から逃れることができたなら、私は幸せになれるのですが。彼女は本学の音楽科を築き上げるのに大きな役割を果たしました。

私たちの学校では、100人ほどの生徒がピアノやオルガンを練習していますが、教師はもちろんですが、ピアノやオルガンさえあれば、あと50人以上生徒を増やすことができるでしょう。この音楽科は学校にとって非常に重要です。どなたか、同志社音楽大学の整備に金貨20万ドルをご寄付いただける方はおられないでしょうか。他の一つの活動分野よりも、音楽を通してもっとより多くの人々をキリスト教に導くことができますし、他のどんなことよりも、日本の家庭を浄化し向上させるものを我が校の生徒たちに身に付けさせることができます！芸者が存在するのは、日本の慎み深い女性たちがあまりにもつまらないからです。男性が楽しい夜を求めて家の外に目を向けても何の不思議ありません。

生徒たちは毎年卒業のときに学校に贈り物をしてくれます。1914年3月に卒業予定の生徒はすでにそのために50円を蓄えています。アイスクリームやドーナツなどを作って販売してお金を稼ぎました。敬愛するギューリック一家¹⁷が突然アメリカへ帰ることになって、バルさんのピアノを売らなければならなくなったのですが、生徒たちは必要な200円を借りてあの愛しいピアノを購入したのです。アイスクリームを作って、学年末までに30円以上を稼いだので、1914年4月までに稼がないといけないのはあと170円です！このピアノはすばらしい状態で、まさに私たちが必要としていたものです。これ以外、まともなピアノが3台、とても調子の悪いピアノが1台と、何台かの

お粗末なオルガンです。少なくとも2台の状態のよいピアノと5台のオルガンをどなたかお送りいただけませんか。事情をお話しますと、生徒たちは毎朝6時には練習を開始して、毎晩9時半まで練習しなければならない状態です。もちろん日中数時間は生徒たちが授業に出席しているのでピアノを使えない時間はありますが、この空き時間でさえ、音楽のレッスンを受ける〔日本人の〕先生方もいますので、ピアノが空いている時間はほとんどありません。

同志社がどれほど素晴らしいか、日本全体のクリスチャンの生活のために、同志社がどれほど役立っているかをそちらの皆さんが理解してくださればと存じます。なぜなら、他のミッションすべてが同志社のお蔭を被っているのですから。ここ〔京都〕にいる私たちは〔同志社でどんなに素晴らしいことが行われているかを〕目の当たりにできる喜びに満ちていますが、ベルさんたちには〔そのために〕大変なお仕事ばかりです。言葉では言い表せないほどベルさんに感謝していますし、ここ〔京都〕に関連するベルさんのお仕事はご想像以上にはるかに重要なのです。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. この書簡は Dear friends で始まっているが、ベル夫妻を指すと考えられる。
2. Bryce, James (1838-1922) アイルランド、ベルファスト出身。イギリスの法学者、政治家。オックスフォード大学ローマ法の欽定講座教授を務めた。1880年に英国下院の自由党議員。1907年、駐米イギリス大使に就任。辞任後、子爵の称号を授与される。1913年、妻とともに来日。7月11日、同志社を訪問。
3. 原田助 前出〈D51〉註13参照。
4. この藤棚やブライス夫妻などが写った写真は同志社女子大学史料センターに現存する。
5. デントンがここで言及している会衆派の雑誌は *The Congregationalist and Christian World* である。
6. 原文では Mr. Bridgeman とある。上記雑誌の当時の主幹、Dr. Howard A.

- Bridgman と思われる。この書簡が書かれた1913年、新聞 *New York Times* の6月8日付の記事 (Smith College でのタベの礼拝について) に、説教者は “Rev. Howard A. Bridgman, DD., of Boston, editor in chief of *the Congregationalist and Christian World*.” とある。Bridgman は神学博士で牧師、そして編集長である。
7. Woman’s Board of Missions 発足の1年後、1869年に創刊された機関誌。当時の正式名は *Life and Light for Heathen Women* で、1873年からは *Life and Light for Woman* と改称された。1922年、アメリカン・ボードの機関誌 *Missionary Herald* に合併されるまで53年間続いた。
 8. Orvis, Julia Swift (1872-1949) ウェルズリー大学歴史学教授。母の Mrs. Orvis とは Susanna Appleton Swift Orvis (1841-1924) である。
 9. 松田道 (道子) (1868-1956) 京都府峰山の裕福な呉服商の家に生まれ、小学校卒業後「京都女学校及び女紅場」に入学。卒業後、英語の勉強のため1884-86年、同志社女学校英書科に、そして1892-93年には高等科に進学。更にフェリス和英女学校で勉強を続ける。津田梅子主唱の「日本婦人米国奨学金」第1号受給者に選ばれて1893-99年渡米。プリンマー大学で学位を取得した。帰国後、同志社女学校初の女性校長 (1922-30年)、女専校長 (1931-33年) の他、理事、同窓会長、寮務主事などを歴任した。
 10. 水崎基一 (1871-1937) 1889年、長野県の開智学校から同志社普通学校へ入学、1893年卒業後、2年間、北海道で囚人の教誨師をつとめた。その後3年間、通訳として台湾総督府に勤務。1899年英国留学し、エジンバラ大学及びロンドン大学で政治経済史を研究して1902年帰国した。東洋汽船に勤めた後、同志社大学経済学部教授に就任。1918年学内騒動のため退職。その後、横浜の現在の浅野中学校・高等学校初代校長となる。なお、夫人の志げ子は同志社女学校卒である。
 11. グリフィス博士の姉はお雇い外国人として1872年来日して、1874年まで官立東京女学校で英語を教えた Margaret Griffis (1838-1913) である。その弟のグリフィス博士は福井藩藩校や大学南校で理科などを教えた William Elliot Griffis (1843-1928) である。
 12. 富森幽香 (1865-1949) 牧野虎次の推薦で1907年3月から平安寮舎監となり、1930年8月まで25年にわたって在職。女学校の授業も担当した。書道家として知られる巖谷一六 (修) の次女で、滋賀県水口生まれ。東京女学校に入学、のち跡見女学校で学ぶ。関西鉄道会社の西村篤と結婚、死別したのち水口伝道所の女性伝道師となる。
 13. 上田敏 (1874-1916) 1909年、京都帝国大学教授。ヨーロッパの詩の訳詩集『海潮音』を出版し、日本に初めて象徴派の詩を紹介した。叔母の上田倂子 (1855?

- 1939) は上田敏の母の妹にあたる。津田梅子らとともにアメリカへ留学した少女5名のうちのひとりだが病のため帰国。その後、医師桂川甫純と結婚。
14. デントンは「皇后によって派遣された」と書いているが、この少女5名は北海道開拓使が募集した留学生であり、岩倉使節団に同行して渡米した。出国前、皇后に拝謁しただけである。
15. Strong, Sydney Dix (1860-1938) オハイオ州やイリノイ州の組合教会で牧師をつとめ、シカゴではセツルメント活動をした。平和主義の活動家として知られ、第1次世界大戦に反対する。このとき京都に同行したのは娘の Anna Louise Strong (1885-1970) である。Anna はのちにジャーナリストとして活躍し、特にソ連、中華人民共和国など共産圏の取材で知られている。
16. DeForest, Louise Hyde (1885- ?) 大阪生まれ。父は1874年来日して大阪や仙台での伝道に従事した John H. DeForest (1844-1911) である。1907年、スミス・カレッジ卒業。1911年に同志社女学校の音楽担当の教師として来日したが、中国 Y.M.C.A. 幹事であった Robert Kelsey Veryard と1913年12月に結婚、離職。
17. Gulick, Sydney (1860-1945) 1888年来日し熊本に滞在。休暇を経て再来日し四国で伝道に従事した後、同志社神学部教授に就任。1913年6月に一時帰国した際に遭遇したカリフォルニアでの排日移民運動をきっかけに、アメリカでの日本人の移民問題解決や日米親善活動に従事する。特に「青い目の人形」を雛祭りの日に合わせて1万体制りを日本に寄贈した活動は有名である。

〈バル書簡 BE-8〉【矢吹世紀代 訳】

1913年9月23日

メアリー F. デントン

日本 京都

拝啓 デントン様

あなたの直筆を目にしたたり、京都から事務局へ届いた通信文への返信を私が書かせてもらえるという栄誉に預かることはそう多くはありません。なぜなら、実際に手紙が届いても、私が光栄にも返事を書かせてもらえるかどうか、いつもよく分からないのです。というのもバートン博士¹には先を越されてしまうのです。彼にはこうして一本取られてしまいます。

冗談はさておき、当局では8月12日付けのお手紙²を受け取り、女学校の様子をより詳しく聞けてとてもうれしかったです。ブリッジマン博士³はデントンさんの手紙の一部を持っていて、そこからブライス大使⁴の京都訪問の記事を書こうとしています。彼は同封されていた写真を欲しいと言ってきましたが、今では果たしてそれを見せるべきだったのかどうか悩んでいます。彼が欲しがるとは当局では全く考えてもいませんでした。雑誌『コングリゲーションナリスト』⁵は『ライフ&ライト』⁶よりも発行部数が多いので、デントンさんにもご納得いただけることでしょう。

デフォレストさん⁷を失うのは辛いことにちがいないでしょうね。学内には何か[怪しい恋の病の]菌でも流行っているのではありませんか。オルチンさん⁸も確か到着後まもなく消えたのではなかったでしょうか。

あなたのお手紙には、一時期私たちの誇りであり喜びでもあったあのピアノのことが書かれていましたので、妻と私は特に関心を持ちました。音色については今はもっといいピアノを持っていますが、日本へ持参した特にあのピアノは、今までに所有した楽器の中でも一番愛着のあるものとして、いつも記憶に残ることでしょう。今どれほどそちらへ行ってみたいことでしょう！

手紙でお伝えすべき大事なことはそれほどありませんし、実際、デントンさんがご存知ないニュースもこれといって思い浮かびません。グリーン博士⁹の訃報に接し、またホワイト夫人¹⁰の重病の知らせに、当方では悲しみに暮れています。ミッションの榮譽ある会員のご逝去は、昨今の私たちの信仰心が試されます。その方々がここ[アメリカ]で肉体ある存在として活動された以上に、靈魂となって日本のためにもっと働かれるだろうということを信じられなかったら、もう亡くなられたという思いに耐えるのははるかに厳しいことです。

フランク・ケーリは到着してすでに仕事に精を出しています。何れにしても彼は兄ジョージに再び挑戦して、ドゥワイト・デイヴィスは言うに及ばず、すでにポール・ローランドの背中を追っています¹¹。

ウィギン氏¹²が有価証券に目を通すため、先週私をアメリカン・ボードの金庫室へ案内してくれました。仕事の実務的な側面を知る珍しい良い機会になりました。ボードの基金は確かに驚くべき手腕で処理されています。ウィギン氏が基金の保全に対して、当然評価されるべきほどにはその功績が認められているのかどうかは疑問です。驚くべきことに、年度末から翌年への会計ではほとんど目減りがみられません。これは彼のすばらしい投資への判断力の賜物です。彼が常に株式の銘柄を入念に調べ、市場の動向を注視して、これはという銘柄に投資するからです。普通の人なら体力がすり減っているかもしれません。

まあ、赤字ではありますが、負債と呼ぶほどではありません。バプティスト派¹³が11万ドルの負債を抱えていることを考えると、ボードの1万1千ドルの負債は取るに足りません。来年度中にはこの赤字を補えることを願いましょう。これら集められた基金は、「20世紀基金」¹⁴のように、収入の少ない年を助けてくれる大きな恵となります。

浦口教授¹⁵が到着され、すでにハーバードに居を構えて落ち着かれました。ハーバード・ユニオン¹⁶にも周りの人は彼を加入させました。そこが想像しうるハーバード精神を理解するのにとってつけの場所だからです。教授はすでに「周りの人に」好感を与えていると思いますし、同志社での文学研究にも役立つ絶好の機会となるでしょう。

パットン博士¹⁷とホスマー氏¹⁸にもこの手紙を回覧しておきます。もっとピアノを調達できる可能性があれば入手できるかもしれませんので。多くの人々の目に触れる場所でアピールできればよいと思います。

敬具

イーノック F. ベル

1. パートン 前出 (BE-6) 註3を参照のこと。ベルは当時副幹事で、幹事のパートンの下で働いていた。

2. 前出のデントン書簡 [D52] のこと。
3. ブリッジマンについては前出 (D52) 註 6 参照のこと。彼が実際に雑誌 *The Congregationalist and Christian World* に書いたこの記事は現存する。ただ、同志社大学図書館所蔵の本誌では製本の具合で正確な掲載誌の号数や日付は不明であるが、この記事の小見出しが ‘Hon. James Bryce visits the Doshisha’ とあり、写真の掲載も確認された。
4. プライス大使 前出 (D52) 註 2 参照。
5. 雑誌 *The Congregationalist* 前出 (D52) 註 5 参照。
6. *Life and Light* 前出 (D52) 註 7 参照。
7. デフォレスト 前出 (D52) 註 16 参照。
8. Allchin, Florence Stratton (1884-1958) 大阪生まれ。アメリカンボードの宣教師。ボストンのシモンズ・カレッジ卒業。1909年来日。京都ステーションには1910年から1911年にかけて1年間在籍。同年 Charles W. Iglehart 牧師と結婚した。父は日本の宗教音楽の発展に貢献し、賛美歌の編集者としても名高いアメリカン・ボード宣教師 George Allchin (1852-1935) である。
9. Greene, Daniel Crosby (1843-1913) アンダーバー神学校を卒業後、1869年アメリカン・ボード最初の宣教師として来日。神戸に赴任。聖書翻訳委員となって横浜に移り、新約聖書の翻訳に従事。完成後、1881年に同志社英学校教授となり、神学、旧約聖書、英文学を講じた。同志社ではレンガ作りの校舎を三棟(彰栄館、チャペル、有終館)を設計した。
10. White, Jennie Isabella (Allen) (1857- ?) アメリカンボード宣教師。夫は Frank Newhall White (1858-1926)。1881年に結婚し、1886年来日。仙台に4年、津に2年在住し、大阪にも1年滞在の後、1893年帰国。
11. この4人はデントンの知る宣教師たちの2世で、すでに世界各地で活躍中であった。Frank Cary (1888-1973) は前出 (BE-6) 註10の Otis Cary の三男で、アメリカン・ボード宣教師として小樽を中心に北海道で宣教に従事した。戦後、再来日して同志社の理事にも就いた。長男の George Emerson Cary (1884- ?) も宣教師である。Jerome Dwight Davis (1891- ?) は前出 (D51) 註 11 の Jerome Dean Davis (1838-1910) の息子である。母は同志社女学校教師で Davis の後添えとなった Francis Hooper (1854-1922) である。Paul Rowland (1887- ?) は宣教師 George Miller Rowland (1859-1941) の息子で神戸に生まれた。父と同じくアメリカン・ボード宣教師だが、ブルガリアで宣教活動をする。
12. ウィギン氏 前出 (BE-6) 註 4 参照。
13. バプテスト派は17世紀初頭、イギリスの清教徒の内部から興ったプロテスタントの1教派で、現在では長老派、組合派と並ぶプロテスタント3大教派の一つである。

- この教派の特徴は聖書のみを信仰の規準とし、洗礼は全身を水に浸す浸礼である。幼児洗礼は認めず信仰告白者のみを教会員としている。万人司祭主義に立ち、各教会の自主独立を認め国家と教会の分離を主張している。
14. 20世紀基金は、アメリカン・ボードの運営資金の多くを支持者からの遺産の寄贈に頼っていたため、毎年変動して不安定だった歳入を安定させるために20世紀から始まった。(The Missionary Herald (1900)、7月号、p.260)
 15. 浦口文治 (1872-1944) 英文学者。兵庫県三田市出身。1884年原田助より受洗。1890年同志社普通学科卒業。その後英文学の教員の資格を取ることを決意。1897年に検定試験に合格し、函館、熊本、越後長岡、台北で英語教員を務めた。1912年、同志社が大学を開学すると同時に、英文科主任教授に就任。現職のままアメリカ留学を命じられ、ハーバード大学院へ入学。1915年帰国。学内紛争のため1918年退職して、東京商科大学教授となる。主な著書『英詩の栞』『ジャン・ラスキン』『新訳ハムレット』など。
 16. 学内でクラブに所属していない学生に社交の場を提供するための学生クラブ。大学のすべての学生が加入できた。実業家 Henry Lee Higginson の寄付により1900年に建設されたレンガ造りの立派な建物で、50年間新入生の食堂として使われた。
 17. Patton, Cornelius H. アメリカン・ボードのボストン本部国内担当幹事
 18. Hosmer, John G. アメリカン・ボード本部事務局の出版購買担当役員